

手袋てぶくろを買いに

新美にいみ南吉なんきち

寒い冬が北方から、狐きつねの親子のすんでいる森へもや
つてきました。

ある朝洞穴ほらあなから子どもこどもの狐が出ようとなりましたが、
「あつ。」
とさけんで、眼めをおさえながら母さん狐のところへこ
ろげてきました。

「母ちゃん、眼に何かささった、ぬいてちようだい早
く早く。」
といいました。

母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、
眼をおさえている子どもこどもの手をおそろおそろのけ

てみましたが、何もささってはいませんでした。母さ
ん狐は洞穴の入口から外へ出てはじめてわけがわかり
ました。昨夜のうちに、まっ白な雪がどっさりふった
のです。その雪の上からお陽ひさまがキラキラと照らし
ていたので、雪はまぶしいほど反射はんしやしていたので。
雪を知らなかった子どもこどもの狐は、あまりつよい反射を
うけたので、眼に何かささったと思ったのでした。

子どもこどもの狐は遊びにいきました。真綿まわたのように柔やわら
かい雪の上をかけまわると、雪の粉こが、しぶきのよう
にとびちって小さい虹にじがすつとうつるのです。

するととつぜん、うしろで、
「どたどた、ざーっ。」

とものすごい音がして、パン粉のような粉雪が、ふわ
ーっと子狐におつかぶさってきました。子狐はびつく
りして、雪の中なかにころがるようにして十メートルも向
こうへにげました。なんだろうと思ってふりかえって
みましたが何もいませんでした。それは樅もみの枝えだから雪

がなだれ落ちたのでした。まだ枝と枝のあいだから白い絹糸きぬいとのように雪がこぼれていました。

まもなく洞穴へ帰ってきた子狐は、

「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする。」

といて、ぬれて牡丹色ぼたんになった両手を母さん狐の前にさしだしました。母さん狐は、その手に、は——つと息をふっかけて、ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、

「もうすぐ暖かくなるよ。雪にさわると、すぐ暖あたたかくなるもんだよ。」

といましたが、かあい坊ぼうやの手に霜焼しもやけができてはかわいそうだから、夜になったら、町までいって、坊やのお手々にあうような毛糸の手袋を買ってやろうと思いました。

暗い暗い夜がふろしきのようなかげをひろげて野原や森を包みにやってきましたが、雪はあまり白いので、

包んでも包んでも白く浮うかびあがっていました。

親子の銀狐は洞穴から出ました。子どもの方はお母さんのお腹なかの下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせながら、あっちやこつちをみながら歩いていきました。

やがて、行手にぽつりあかりが一つみえはじめました。それを子どもの狐がみつけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんなに低いところにも落ちてるのねえ。」

とききました。

「あれは、お星さまじゃないのよ。」
といて、そのとき母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは、町の灯ひなんだよ。」

その町の灯をみたとき、母さん狐は、あるとき町へお友だちと出かけていって、とんだめにあったことを思い出しました。およしなさいっていうのもきかない

で、お友だちの狐が、ある家の家鴨あひるをぬすもうとしたので、お百姓ひやくしやうにみつかつて、さんざん追いまくられて、命からがらにげたことでした。

「母ちゃん何してんの、早くいこうよ。」

と、子どもの狐がお腹の下からいうのでしたが、母さん狐はどうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけをひとりで町までいかせることになりました。

「坊やお手々を片方かたほうお出し。」

と母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらくにぎっているあいだに、かわいい人間の子どもの手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたりにぎったり、つねってみたり、かいでみたりしました。

「なんだか変だな母ちゃん、これなあに？」

とって、雪あかりに、またその、人間の手にかえられてしまった自分の手をしげしげとみつめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へいったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表にまるいシヤツポの看板かんばんのかかっている家をさがすんだよ。それがみつかったらね、トントンと戸をたたいて、こばんはつていうんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸を開けるからね、その戸のすきまから、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちようどいい手袋ちようどいっていうんだよ。わかったね、けっして、こっちのお手々を出しちやだめよ。」

と、母さん狐はいいきかせました。

「どうして？」

と坊やの狐はききかえました。

「人間はね、相手が狐だとわかると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、つかまえて檻おろの中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとにこわいものなんだよ。」

「ふーん。」

「けっして、こっちの手を出しちやいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ。」

と、母さんの狐は、持ってきた二つの白銅貨はくどうかを、人間の手の方へにぎらせてやりました。

子どもの狐は、町の灯を目あてに、雪あかりの野原をよちよちやっけていきました。はじめのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子どもはそれをみて、灯には、星と同じように、赤いのや黄きいいのや青いのがあるんだなと思えました。やがて町にはいりましたが通りの家々はどうみんな戸をしめてしまつて、高い窓まじから暖かそうな光りが、道の雪の上に落ちているばかりでした。

けれど表の看板の上にはたいい小さな電灯がともっていましたので、狐の子は、それをみながら、帽子ぼうし屋をさがしていきました。自転車の看板や、眼鏡めがねの看板やそのほかいろんな看板が、あるものは、新しいペ

ンキでえがかれ、あるものは、古い壁かべのようにはげていましたが、町にはじめて出てきた子狐にはそれらのものがいったいなんであるかわからないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電灯に照らされてかかっています。

子狐は教えられた通り、トントンと戸をたたきました。

「こんばんは。」

すると、中では何かことごと音がしていました。やがて、戸が一寸いっすんほどゴロリとあいて、光りの帯が道の白い雪の上に長くのびました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらつて、まちがった方の手を、——お母さまが出しちやいけないといつてよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちようどいい手袋ください。」

すると帽子屋さんには、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれというのです。これはきつと木の葉で買いにきたんだなと思いました。そこで、「先にお金をください。」

といいました。子狐はすなおに、にぎってきた白銅貨を二つ帽子屋さんにお渡ししました。帽子さんはそれを人さし指のさきにつけて、カチ合わせてみると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんのお金だと思いましたので、棚たなから子ども用の毛糸の手袋をとり出してきて子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼をいってまた、もときた道を帰りはじめました。

「お母さんは、人間はおそろしいものだっておっしゃったがちつともおそろしくないや。だってぼくの手をみてもどうもしなかつたもの。」

と思いました。けれど子狐はいたい人間なんてどんなものかみたいと思いました。

ある窓まどの下を通りかかると、人間の声がしていました。なんとというやさしい、なんとという美しい、なんというおっとりした声なんでしょう。

「ねむれ　ねむれ

母の胸（まど）に、

ねむれ　ねむれ

母の手に――。」

子狐は、そのうた声は、きつと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐がねむるときにも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声ですぶつてくれるからです。

するとこんどは、子どもの声がしました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いってないでるでしょうね。」

すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のおうたをきいて、洞穴の中でねむろうとしているでしょうね。さあ坊やも早く

ねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きつと坊やの方が早くねんねしますよ。」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなつて、「まあ！」

お母さん狐の待っている方へとんでいきました。

とあきました、

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰ってくるのを、いまかいまかとふるえながら待っていました

「ほんとうに人間はいいものかしら。」

ので、坊やがくると、暖かい胸にだきしめてなきたいほどよろこびました。

ほんとうに人間はいいものかしら。」

二ひきの狐は森の方へ帰っていきました。月が出たので、狐の毛並みが銀色に光り、その足あとには、コバルトのかげがたまりました。

「母ちゃん、人間ってちつともこわかないや。」

「どうして？」

「坊、まちがえてほんとうのお手々出しちゃったの。」

でも帽子屋さん、つかまえやしなかったもの。ちやんとこない暖かい手袋くれたもの。」

「手袋を買いに」

※『新装版 新美南吉童話集1 ごん狐』
(2012年12月1日、大日本図書株式会社)
の「手袋を買いに」をもとに編集しました。
漢字については小学4年生までの学習漢字を基本とし、学習していない漢字には初出にルビをうちました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。

(TEL: 0569-26-4888)